

第7回 日本語の歴史的典籍国際研究集会

古典と地域を結ぶICT活用教育の可能性 －楽しみながら学ぶ 「木曾路双六」・「ことわざ絵合わせ」－

速水 香織（信州大学人文学部准教授）HAYAMI Kaori

中村 綾（愛知学院大学教養部講師）NAKAMURA Aya

宮本 祐規子（白百合女子大学文学部准教授）MIYAMOTO Yukiko



目的

ICT教育及び文科省が推進する **ギガスクール構想** を視野に、双六やカルタといった **伝統的な遊具による主体的・対話的な学習を実現しうる学習ツール** の開発に取り組む国文学研究資料館の共同研究について紹介する。

本共同研究では、新日本古典籍総合DBを使用し、楽しみながら古典的知識、それに付随する地域の歴史や文化について学ぶ教材の開発を試みている。



ICT教育

ICT（情報通信技術）とは、PCだけでなくスマートフォンやスマートスピーカーなど、さまざまな形状のコンピュータを使った情報処理や通信技術の総称。

ICT = 「IT（情報技術）」 + 「Communication（通信、伝達）」

- ・ITよりも通信によるコミュニケーションの重要性
（単なる情報処理にとどまらず、ネットワーク通信を利用した情報や知識の共有を重要視）

ICT教育・・・教育のデジタル化

- ・教育現場では、PCやタブレット、インターネットなどの教材が活用されている。
- ・子どもたちの**情報活用能力**を育成する情報教育+ICTを活用した教科指導+校務の情報化（「新学習指導要領」（2020年度）で言語能力と同様の「学習の基盤となる資質・能力」）
- ・従来の学校教育を補強する形で基本的な知識や技能を習得させるとともに思考力、判断力、表現力などを育成して、主体的かつ他者と協働して問題解決に取り組む力を養う。
- ・多様な子どもたちに最適な学びを実現するとともに、更なる教育の質の向上や政策への反映も期待できる。



ギガスクール構想

- ・ 1人1台端末環境→令和の時代における学校の「スタンダード」

- ・ **ICTの導入・運用を加速**

→授業準備等の負担軽減・学校の働き方改革にも資する

「これまでの我が国の150年に及ぶ教育実践の蓄積の上に、最先端のICT教育を取り入れ、これまでの実践とICTとのベストミックスを図っていくことにより、これからの学校教育は劇的に変わります。」（文部科学省HP）

- ・ **ICT環境の整備**

①公正に個別最適化された学びや創造性を育む学びにも寄与するもの

②子供たちがICTを適切・安全に使いこなすことができるようネットリテラシーなどの情報活用能力を育成していくことも重要

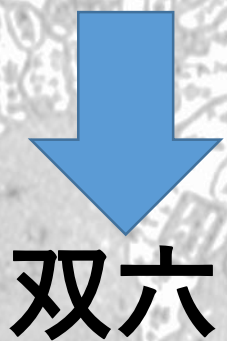
・「文部科学省としては、1人1台端末環境の整備に加えて、来年度から始まる新学習指導要領を着実に実施していくとともに、現在行われている中央教育審議会における議論も踏まえ、教育課程や教員免許、教職員配置の一体的な制度の見直しや、研修等を通じた教員のICT活用指導力の向上、情報モラル教育をはじめとする情報教育の充実など、ハード・ソフトの両面からの教育改革に取り組みます。」（文部科学省HP）



穂里籬島編

『木曾路名所圖會』

文化2（1805）年刊



具体的には後ほど説明させて戴きます

鋤形蕙斎『諺画苑』
文化5（1808）年成立



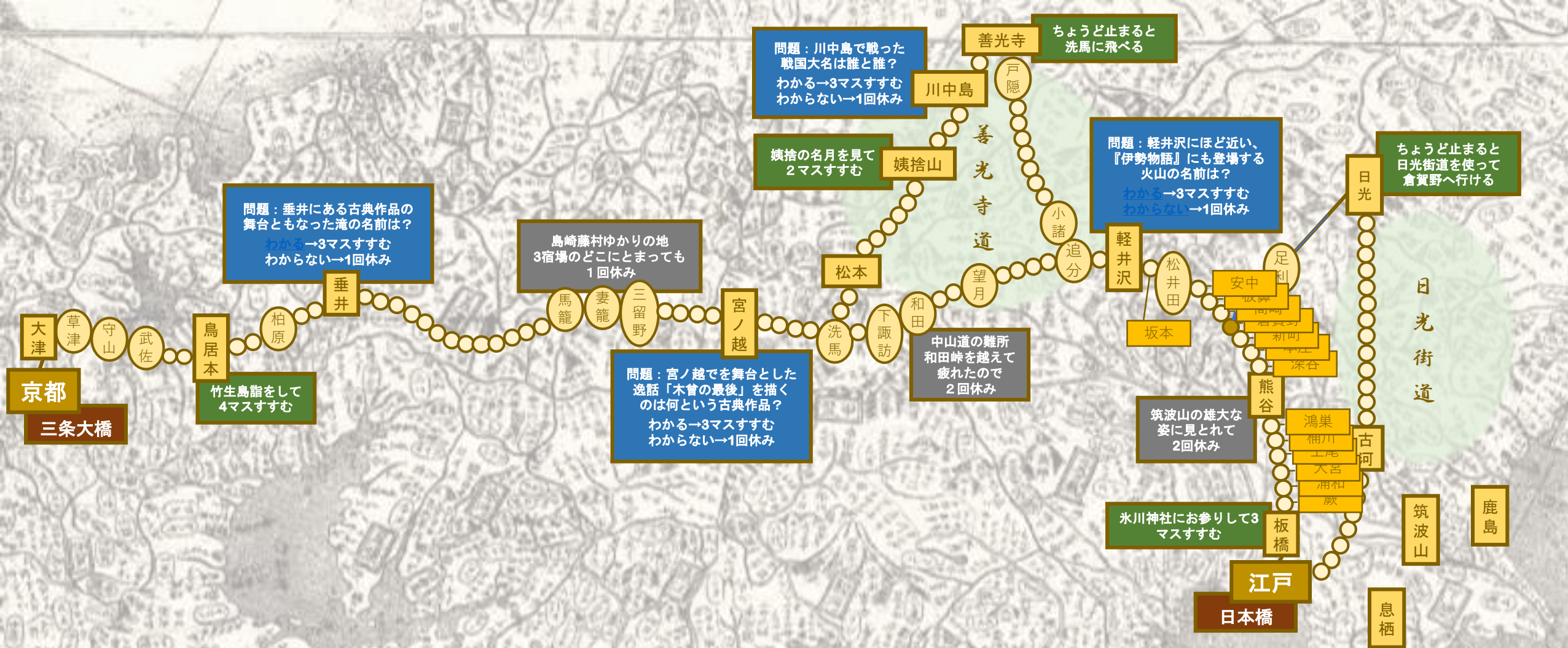
カルタ



東京藝術大学附属図書館 協本文庫デジタル R721.8 - 14、
DOI : 10.20730/100288086
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100288086/viewer/15>







正解：浅間山 あさまやま



浅間山の図（文化九年〈1812〉刊『日本名山図会』より）
国文学研究資料館蔵、DOI:10.20730/200017002
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200017002/viewer/10>

『伊勢物語』第八段挿絵
（万治二年〈1659〉刊本より 原本所蔵：関西大学図書館）
DOI:10.20730/100271179
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100271179/viewer/13>

信濃国（現長野県北佐久郡）と上野国（現群馬県吾妻郡）との国境にある活火山。古くは『日本書紀』（養老四年〈七二〇〉成立）に噴火の記録が見える。『伊勢物語』（平安時代前期成立）第八段に「信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ」とあるなど、歌枕として和歌にしばしば詠まれた。活火山であり、噴煙を上げることから、燃え上がる恋心に例えられることが多い。



現在の浅間山

『伊勢物語』
第八段本文を読む 

すごろくに戻る 

『伊勢物語』 第八段 本文（『新編日本古典文学全集』12巻より）

むかし、男ありけり。京やすみ憂^(う)かりけむ、あづまの方^(かた)にゆきて、すみ所もとむとて、友とする人、ひとりふたりしてゆきけり。信濃^(しなの)の国、浅間^(あさま)の嶽^(たけ)に煙^(けぶり)の立つを見て、

信濃^(しなの)なるあさまのたけに立つけぶり をちこち人の見やはとがめぬ

【現代語訳】昔、男がいた。京が住みづらかったのだろうか、東国の方に行って、住む場所をさがそうとして、友人、一、二人とともに行った。途中、信濃の国の、浅間の山に噴煙が立ちのぼるのを見て、歌を詠む。

信濃の国にある浅間山に立ちのぼる煙、遠近^(おちこち)の人々はこれを見て怪しまないだろうか。

さぞ奇異なものだと訝^(いぶか)ることだろう

【参考：浅間山を詠んだ和歌】

いつとてかわが恋やまむちはやぶる浅間の嶽の煙絶ゆとも（『拾遺和歌集』恋一、読人不知）

あさましや浅間の山に立つ煙絶えぬ思ひを知る人もなし（『拾遺愚草』、藤原定家）



大津
京都
三条大橋

鳥居本

竹生島詣をして
4マスすすむ

問題：垂井にある古典作品の
舞台ともなった滝の名前は？
わかる→3マスすすむ
わからない→1回休み

垂井

島崎藤村ゆかりの地
3宿場のどこにとまっても
1回休み

馬籠 妻籠 三留野

宮ノ越

問題：宮ノ越でを舞台とした
逸話「木曾の最後」を描く
のは何という古典作品？
わかる→3マスすすむ
わからない→1回休み

松本

洗馬

下諏訪

和田

中山道の難所
和田峠を越えて
疲れたので
2回休み

望月

追分

軽井沢

筑波山の雄大な
姿に見とれて
2回休み

熊谷

氷川神社にお参りして3
マスすすむ

板橋

江戸
日本橋

息栖

筑波山

鹿島

古河

日光街道

日光

ちょうど止まると
日光街道を使って
倉賀野へ行ける

足利

松井田

問題：軽井沢にほど近い、
『伊勢物語』にも登場する
火山の名前は？
わかる→3マスすすむ
わからない→1回休み

小諸

戸隠

ちょうど止まると
洗馬に飛べる

善光寺

川中島

問題：川中島で戦った
戦国大名は誰と誰？
わかる→3マスすすむ
わからない→1回休み

姨捨山

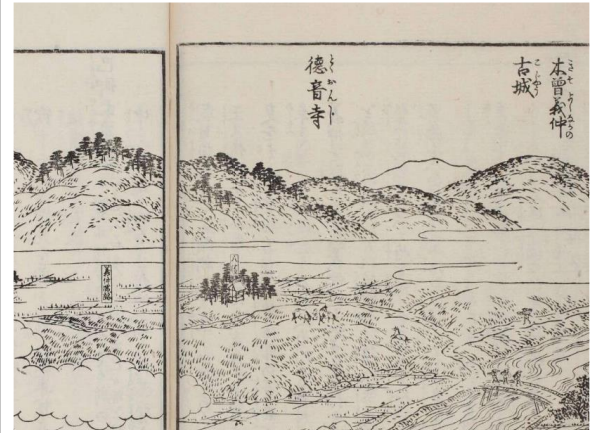
姨捨の名月を見て
2マスすすむ

宮ノ越みやのこし

〈トリビア情報〉道の駅日義木曽駒高原には、「中山道東西中間の地」の道標がある。よく晴れた日には、ここから雄大な木曽駒ヶ岳を目前に望むことができる。

【概要・歴史的情報】宮ノ越は中山道三十六番目の宿場で、現在は長野県木曽郡木曽町日義に位置する。平家物語などに描かれる源義仲（木曽義仲）はこの地で育ち、やがて挙兵して平家と戦ったが、近江国粟津原で討ち死にした。宮ノ越には義仲館、巴洲など義仲ゆかりの資料館や史跡があるほか、徳音寺には義仲一族や今井兼平らの墓碑も並ぶ。

【絵図等】

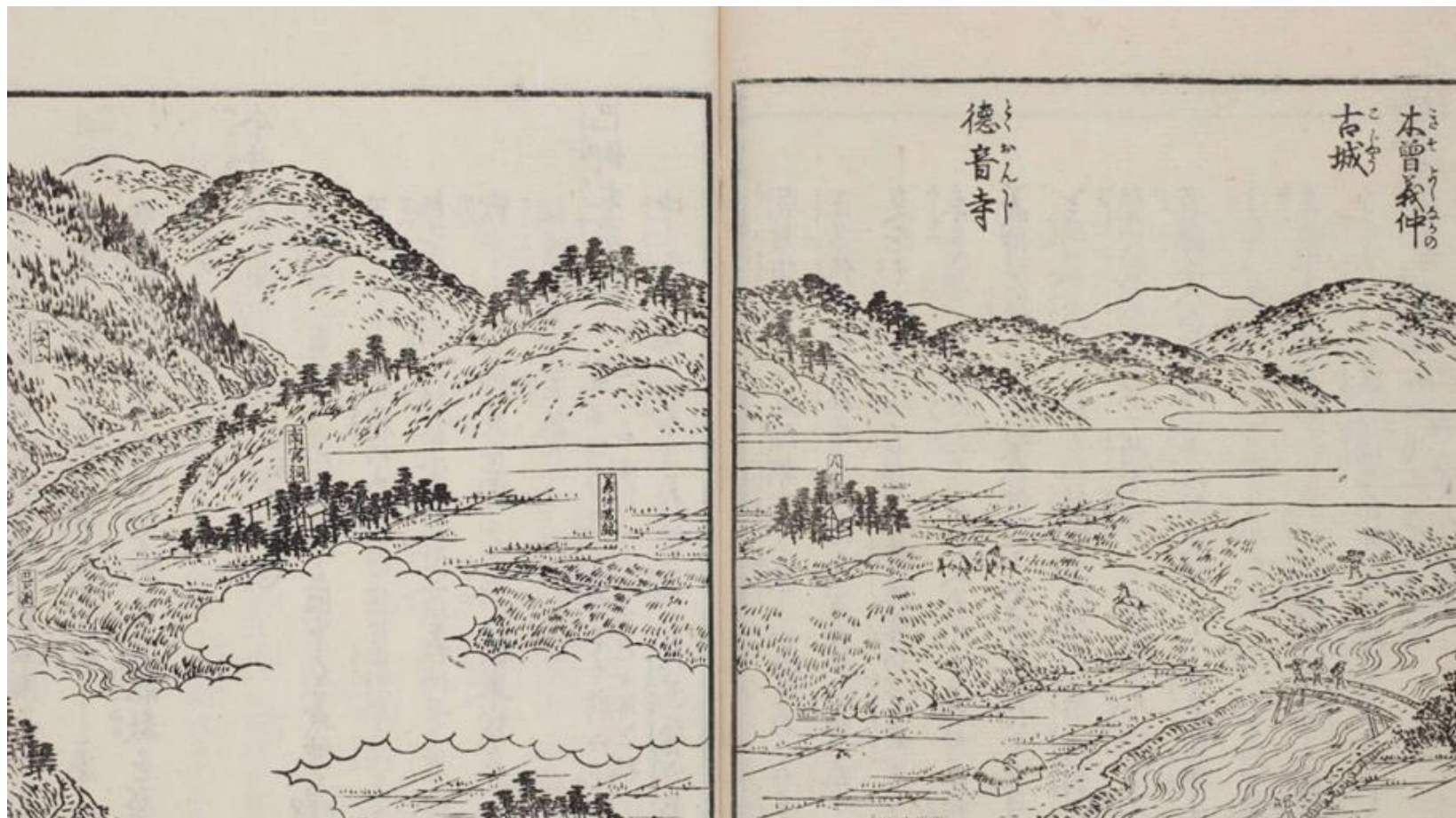


【文学史的情報】源義仲（木曽義仲）は三歳の時に父義賢が源義平（頼朝の長兄）に討たれ、母とともに信濃に逃げ、今井兼遠のもとに預けられた。兼遠の子である兼平とは乳兄弟として一緒に育った。やがて以仁王の令旨に応じて木曾で挙兵し、北陸道で平氏を制した。そして入京を果たし、征夷大將軍に任じられたが、頼朝の許可なく挙兵したため、頼朝勢に追われ、琵琶湖の粟津ヶ原で自害した。義仲が信濃で育った地が宮ノ越であるといわれる（『諸説あり』）。この地では今も義仲が木曾で過ごした歴史を展示する義仲館をはじめ、巴御前が水浴したといわれる巴洲などに訪れることができる。また、近世期には今井四郎兼平館も残っていたとされる。平家物語では田舎者の義仲が上京した際の立ち居振る舞いが滑稽に描かれるが、近世期の俳人、松尾芭蕉は源氏の武将の中で義仲を最も愛し、義仲の隣に葬られることを望んだため、現在滋賀県大津市にある義仲寺には、義仲と芭蕉の墓が並んでいる。

【参考文献】

秋里籠島『木曽路名所図会』文化十一年刊
『平家物語』

絵図



『木曾路名所図会』 国文学研究資料館蔵

DOI : 10.20730/200018956

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200018956/viewer/190>

【概要・歴史的情報】

宮ノ越は中仙道三十六番目の宿場で、
現在は長野県木曽郡木曽町日義に位置する。
平家物語などに描かれる源義仲（木曽義仲）はこの地で育ち、
やがて挙兵して平家と戦ったが、近江国栗津原で討ち死にした。
宮ノ越には義仲館、巴淵など義仲ゆかりの資料館や史跡があるほか、
徳音寺には義仲一族や今井兼平らの墓碑も並ぶ。

宮ノ越宿本陣



【概要・歴史的情報】

宮ノ越は中仙道三十六番目の宿場で、
現在は長野県木曽郡木曽町日義に位置する。

平家物語などに描かれる源義仲（木曽義仲）はこの地で育ち、
やがて挙兵して平家と戦ったが、近江国栗津原で討ち死にした。
宮ノ越には義仲館、巴淵など義仲ゆかりの資料館や史跡があるほか、
徳音寺には義仲一族や今井兼平らの墓碑も並ぶ。

宮ノ越宿本陣



【概要・歴史的情報】

宮ノ越は中仙道三十六番目の宿場で、
現在は長野県木曽郡木曽町日義に位置する。

平家物語などに描かれる源義仲（木曽義仲）はこの地で育ち、
やがて挙兵して平家と戦ったが、近江国栗津原で討ち死にした。

宮ノ越には義仲館、巴淵など義仲ゆかりの資料館や史跡があるほか、
徳音寺には義仲一族や今井兼平らの墓碑も並ぶ。

宮ノ越宿本陣



【文学史的情報】

源義仲（木曾義仲）は三歳の時に父義賢が源義平（頼朝の長兄）に討たれ、母とともに信濃に逃げ、今井兼遠のもとに預けられた。

兼遠の子である兼平とは乳兄弟として一緒に育った。

やがて以仁王の令旨に応じて木曾で挙兵し、北陸道で平氏を制した。

そして入京を果たし、征夷大將軍に任じられたが、頼朝の許可なく挙兵したため、頼朝勢に追われ、琵琶湖の粟津ヶ原で自害した。

義仲が信濃で育った地が宮ノ越であるといわれる（諸説あり）。

この地では、義仲が木曾で過ごした歴史を展示する義仲館をはじめ、巴御前が水浴したといわれる巴淵などに今も訪れることができる。

また、近世期には今井四郎兼平館も残っていたとされる。

『平家物語』では田舎者の義仲が上京した際の立ち居振る舞いが滑稽に描かれるが、

近世期の俳人、松尾芭蕉は源氏の武将の中で義仲を最も愛し、義仲の隣に葬られることを望んだため、現在滋賀県大津市にある義仲寺には、義仲と芭蕉の墓が並んでいる。



義仲館

【文学史的情報】

源義仲（木曾義仲）は三歳の時に父義賢が源義平（頼朝の長兄）に討たれ、母とともに信濃に逃げ、今井兼遠のもとに預けられた。

兼遠の子である兼平とは乳兄弟として一緒に育った。

やがて以仁王の令旨に応じて木曾で挙兵し、北陸道で平氏を制した。

そして入京を果たし、征夷大將軍に任じられたが、頼朝の許可なく挙兵したため、頼朝勢に追われ、琵琶湖の粟津ヶ原で自害した。

義仲が信濃で育った地が宮ノ越であるといわれる（諸説あり）。この地では、義仲が木曾で過ごした歴史を展示する義仲館をはじめ、巴御前が水浴したといわれる巴淵などに今も訪れることができる。また、近世期には今井四郎兼平館も残っていたとされる。

『平家物語』では田舎者の義仲が上京した際の立ち居振る舞いが滑稽に描かれるが、近世期の俳人、松尾芭蕉は源氏の武将の中で義仲を最も愛し、義仲の隣に葬られることを望んだため、現在滋賀県大津市にある義仲寺には、義仲と芭蕉の墓が並んでいる。



義仲館

【文学史的情報】

源義仲（木曾義仲）は三歳の時に父義賢が源義平（頼朝の長兄）に討たれ、母とともに信濃に逃げ、今井兼遠のもとに預けられた。

兼遠の子である兼平とは乳兄弟として一緒に育った。

やがて以仁王の令旨に応じて木曾で挙兵し、北陸道で平氏を制した。

そして入京を果たし、征夷大將軍に任じられたが、頼朝の許可なく挙兵したため、頼朝勢に追われ、琵琶湖の粟津ヶ原で自害した。

義仲が信濃で育った地が宮ノ越であるといわれる（諸説あり）。

この地では、義仲が木曾で過ごした歴史を展示する義仲館をはじめ、巴御前が水浴したといわれる巴淵などに今も訪れることができる。

また、近世期には今井四郎兼平館も残っていたとされる。

『平家物語』では田舎者の義仲が上京した際の立ち居振る舞いが滑稽に描かれるが、

近世期の俳人、松尾芭蕉は源氏の武将の中で義仲を最も愛し、義仲の隣に葬られることを望んだため、現在滋賀県大津市にある義仲寺には、義仲と芭蕉の墓が並んでいる。



義仲館

【文学史的情報】

源義仲（木曾義仲）は三歳の時に父義賢が源義平（頼朝の長兄）に討たれ、母とともに信濃に逃げ、今井兼遠のもとに預けられた。

兼遠の子である兼平とは乳兄弟として一緒に育った。

やがて以仁王の令旨に応じて木曾で挙兵し、北陸道で平氏を制した。

そして入京を果たし、征夷大將軍に任じられたが、

頼朝の許可なく挙兵したため、頼朝勢に追われ、

琵琶湖の粟津ヶ原で自害した。

義仲が信濃で育った地が宮ノ越であるといわれる（諸説あり）。

この地では、義仲が木曾で過ごした歴史を展示する義仲館をはじめ、

巴御前が水浴したといわれる巴淵などに今も訪れることができる。

また、近世期には今井四郎兼平館も残っていたとされる。

『平家物語』では田舎者の義仲が上京した際の

立ち居振る舞いが滑稽に描かれるが、

近世期の俳人、松尾芭蕉は源氏の武将の中で義仲を最も愛し、

義仲の隣に葬られることを望んだため、現在滋賀県大津市にある

義仲寺には、義仲と芭蕉の墓が並んでいる。



巴淵

【文学史的情報】

源義仲（木曾義仲）は三歳の時に父義賢が源義平（頼朝の長兄）に討たれ、母とともに信濃に逃げ、今井兼遠のもとに預けられた。

兼遠の子である兼平とは乳兄弟として一緒に育った。

やがて以仁王の令旨に応じて木曾で挙兵し、北陸道で平氏を制した。

そして入京を果たし、征夷大將軍に任じられたが、頼朝の許可なく挙兵したため、頼朝勢に追われ、琵琶湖の栗津ヶ原で自害した。

義仲が信濃で育った地が宮ノ越であるといわれる（諸説あり）。

この地では、義仲が木曾で過ごした歴史を展示する義仲館をはじめ、巴御前が水浴したといわれる巴淵などに今も訪れることができる。

また、近世期には今井四郎兼平館も残っていたとされる。

『平家物語』では田舎者の義仲が上京した際の立ち居振る舞いが滑稽に描かれるが、近世期の俳人、松尾芭蕉は源氏の武将の中で義仲を最も愛し、義仲の隣に葬られることを望んだため、現在滋賀県大津市にある義仲寺には、義仲と芭蕉の墓が並んでいる。



巴淵

【文学史的情報】

源義仲（木曾義仲）は三歳の時に父義賢が源義平（頼朝の長兄）に討たれ、母とともに信濃に逃げ、今井兼遠のもとに預けられた。

兼遠の子である兼平とは乳兄弟として一緒に育った。

やがて以仁王の令旨に応じて木曾で挙兵し、北陸道で平氏を制した。

そして入京を果たし、征夷大將軍に任じられたが、頼朝の許可なく挙兵したため、頼朝勢に追われ、琵琶湖の栗津ヶ原で自害した。

義仲が信濃で育った地が宮ノ越であるといわれる（諸説あり）。

この地では義仲が木曾で過ごした歴史を展示する義仲館をはじめ、巴御前が水浴したといわれる巴淵など今も訪れることができる。

また、近世期には今井四郎兼平館も残っていたとされる。

『平家物語』では田舎者の義仲が上京した際の立ち居振る舞いが滑稽に描かれるが、

近世期の俳人、松尾芭蕉は源氏の武将の中で義仲を最も愛し、義仲の隣に葬られることを望んだため、現在滋賀県大津市にある義仲寺には、義仲と芭蕉の墓が並んでいる。

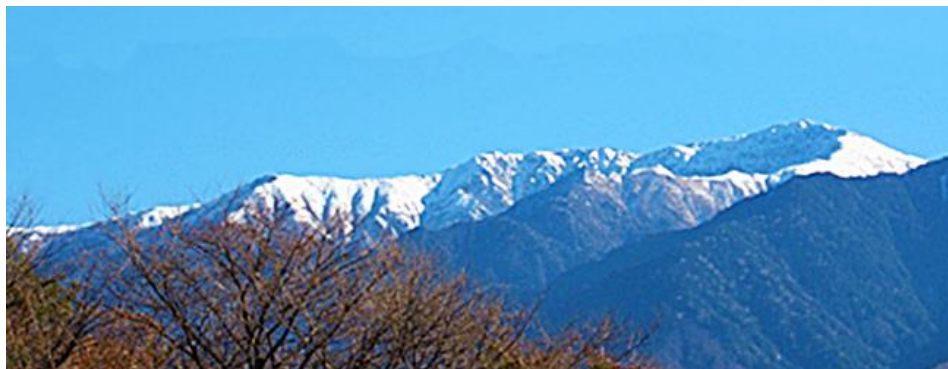


巴淵

〈トリビア情報〉

道の駅、日義木曽駒高原には「中山道東西中間の地」の道標がある。

よく晴れた日には、ここから雄大な木曽駒ヶ岳を目前に望むことができる。



〈トリビア情報〉三井寺の鐘は近江八景の一つ「三井の晩鐘」で有名であるが、この鐘は依藤太秀郷が百足退治をして龍神から授かった鐘である。また、その後、弁慶が山門との争いで比叡山に引き摺上げたことでも有名。

大津 おおつ



【概要・歴史的情報】かつて天智天皇が飛鳥岡本京から大津に都を移した。大津京はわずか五年で別の地に遷都されたが、以来、古い歴史を有する。大津には多くの寺社仏閣が現存しており、平安時代には多くの貴族たちが遊山と信仰を兼ねて参詣に訪れた。江戸時代には町人が高い経済力を誇り、町人文化が花開いた。大津祭にその名残が見られる。

【文学史的情報】平安時代には石山寺や唐崎神社には多くの貴族が参詣に訪れた。また、江戸時代には大きな宿場街として栄えた。紫式部が石山寺で源氏物語を起筆したことは有名である。また、志賀浦、長等山、唐崎、打出浜、瀬田橋など多くの地が歌枕として和歌に詠われる。江戸時代、上田秋成『雨月物語』の一篇「夢心の鯉魚」では、魚になって琵琶湖を遊泳していた僧侶が後に「まず長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大湾の汀に遊べば、かち人の裳のすぬらすゆきかひに驚かれて、比良の高山影うつる、深き水底」に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつつなき。(中略)…矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたたかなれば浮かび、風あらしときは千尋の底に遊ぶ。」と語る。この琵琶湖の名所を巡る道行文は後世、三島由紀夫に絶賛にされた。

【参考文献】

秋里籠島『木曾路名所図会』文化十一年刊）
上田秋成『雨月物語』夢心の鯉魚

『木曾路名所図会』
国文学研究資料館蔵
DOI：10.20730/200018956
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200018956/viewer/30>

【文学史的情報】

平安時代には石山寺や唐崎神社には多くの貴族が参詣に訪れた。

また、江戸時代には大きな宿場街として栄えた。

紫式部が石山寺で源氏物語を起筆したことは有名である。

また、志賀浦、長等山、唐崎、打出浜、瀬田橋など多くの地が歌枕として和歌に詠われる。

江戸時代、上田秋成『雨月物語』の一編「夢応の鯉魚」では、魚になって琵琶湖を遊泳していた僧侶が後に「まず長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大湾の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる、深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつなき。

（中略）…矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたたかなれば浮かび、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。」と語る。

この琵琶湖の名所を巡る道行文は後世、三島由紀夫に絶賛された。

【文学史的情報】

平安時代には石山寺や唐崎神社には多くの貴族が参詣に訪れた。

また、江戸時代には大きな宿場街として栄えた。

紫式部が石山寺で源氏物語を起筆したことは有名である。

また、志賀浦、長等山、唐崎、打出浜、瀬田橋など多くの地が歌枕として和歌に詠われる。

江戸時代、上田秋成『雨月物語』の一編「夢応の鯉魚」では、魚になって琵琶湖を遊泳していた僧侶が後に「まず長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大湾の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる、深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつなき。

（中略）…矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたたかなれば浮かび、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。」と語る。

この琵琶湖の名所を巡る道行文は後世、三島由紀夫に絶賛された。

【文学史的情報】

平安時代には石山寺や唐崎神社には多くの貴族が参詣に訪れた。

また、江戸時代には大きな宿場街として栄えた。

紫式部が石山寺で源氏物語を起筆したことは有名である。

また、志賀浦、長等山、唐崎、打出浜、瀬田橋など多くの地が歌枕として和歌に詠われる。

江戸時代、上田秋成『雨月物語』の一編「夢応の鯉魚」では、魚になって琵琶湖を遊泳していた僧侶が後に「まず長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大湾の汀に遊べば、

かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる、深き水底）に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつなき。
（中略）…矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたたかなれば浮かび、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。」と語る。

この琵琶湖の名所を巡る道行文は後世、三島由紀夫に絶賛にされた。

〈トリア情報〉

三井寺の鐘は近江八景の一つ「三井の晩鐘」で有名であるが、この鐘は俵藤太秀郷が百足退治をして龍神から授かった鐘である。

また、その後、弁慶が山門との争いで比叡山に引き摺り上げたことでも有名。

『近江名所図会』

国文学研究資料館 蔵

DOI : 10.20730/200006257

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200006257/viewer/66>

